

平成 28 年度  
福島県教職員特選研究論文集



福島県教育委員会



# はじめに

本研究論文の募集は、教職員の自主的な研究を奨励し、効果的な実践や先進的な取組を研究論文としてまとめることを通して研修意欲や専門性を高め、教職員個々の資質の向上を図ることを目的として実施しているものであり、昭和46年度の第1回から本年度で45回を数えます。その長い歴史の中で、数多くの教職員がその時代を反映した様々な教育課題に真正面から取り組み、貴重な成果を発表してこられました。

平成23年度は東日本大震災及び原発事故により、募集を行いませんでしたが、平成24年度から募集を再開し、平成28年度は、各教科、道徳、特別支援教育、学習指導法など、様々な領域にわたる論文が30点寄せられました。ここに収められた論文は、これらの中から、慎重な審査を経て特選に選ばれたものであります。

福島県は今、未曾有の災害から、復旧・復興に向けて県民一丸となって邁進しているところであり、「何より重要なのは人づくりである」ことを再確認し、未来の福島県を支える人材の育成に向け、日々の学校教育で児童生徒に「生き抜く力」を育てていかなければなりません。

このような中であって、いずれの研究もそれぞれの学校、学級及び教科等の課題を的確にとらえながら、指導方法・内容の質的改善を図った優れた実践研究として高い評価を得たものであり、各学校が抱える学習指導上の様々な課題の解決へ向け、具体的な示唆を与えるものであります。

各学校におかれましては、これらの研究成果を参考として実践し、本県の復興・再生を共に担う人づくりのために、研究をさらに深められ、今後の本県学校教育の充実・改善に大いに役立てていただきたいと思います。

最後になりますが、応募されました皆様の御努力に心から敬意を表しますとともに、本県教職員の研修意欲や専門性がさらに高まり、結果として、児童生徒の「生き抜く力」の育成に結び付いていくことを期待いたします。

平成29年3月

福島県教育庁義務教育課長

佐藤 秀美

# 目 次

## はじめに

平成28年度福島県教職員研究論文入賞者一覧	1
-----------------------	---

## 特選研究論文

### ○ 学習指導

「人とかかわりながら課題を解決できる子どもの育成」 ～『学び合い』を基盤として～ 第2期 第1次	2
伊達市立保原小学校 代表 佐藤 喜夫	

### ○ 学習指導

共に関わり合い、自らを高める子どもの育成 ～言葉でつながり合う学びを通して～	6
郡山市立芳賀小学校 代表 堀内 真人	

### ○ 外国語活動

英語に対する興味・関心を持ち 積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成 ～Information Gap を取り入れた活動を通して～	10
白河市立小野田小学校 教諭 荒井 智	

審査の観点及び審査総評	14
-------------	----

◇ 平成28年度福島県教職員研究論文応募状況	15
------------------------	----

◇ 平成28年度福島県教職員研究論文応募者一覧	16
-------------------------	----

## おわりに

## 平成28年度 福島県教職員研究論文入賞者一覧

### 【特選】

領域等	個人 団体	学校名	職名・氏名	よみがな	研究主題
学習指導	団体	伊達市立保原小学校	(代表) 校長 佐藤 喜夫	さとう よしお	「人とかがわりながら課題を解決できる子どもの育成」 ～『学び合い』を基盤として～ 第2期 第1次
学習指導	団体	郡山市立芳賀小学校	(代表) 校長 堀内 真人	ほりうち まさと	共に関わり合い、自らを高める子どもの育成 ～言葉でつながり合う学びを通して～
学習指導 (外国語活動)	個人	白河市立小野田小学校	教諭 荒井 智	あらい さとし	英語に対する興味・関心を持ち 積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成 ～Information Gap を取り入れた活動を通して～

### 【入選】

領域等	個人 団体	学校名	職名・氏名	よみがな	研究主題
学習指導 (算数科)	団体	郡山市立朝日が丘小学校	(代表) 校長 圓谷 円	つむらや まるみ	いきいきと学び、確かな学力を身につけていく子どもの育成 ～一人一人が「わかる」「できる」「伸びる」喜びを味わえる算数科学習の工夫～
学習指導	団体	郡山市立郡山第一中学校	(代表) 校長 味原 悦雄	あじはら えつお	主体的に学び、表現できる生徒の育成 ～表現力を育てる指導の工夫 (3年次)～
学習指導 (国語科)	団体	塙町立塙小学校	(代表) 校長 鈴木 雅人	すずき まさと	適切に表現したり、正確に理解したりする力の育成 ～読む力を育てる言語活動の充実～
学級経営	個人	会津若松市立鶴城小学校	教諭 岩本 宏幸	いわもと ひろゆき	「アクティブ・ラーニング」で協働的・互恵的な子供が育つ学級経営 ～「つながる」関係の基盤作りと「振り返り」の充実で汎用的能力を高める実践を を通して～
学習指導 (国語科、算数科、 特別支援教育)	団体	喜多方市立第二小学校	(代表) 校長 神田 優子	かんだ ゆうこ	「自ら学び、考える力を伸ばす授業の創造」 ～学ぶ喜びを味わわせる 子ども主体の学び合いを通して～
学習指導 (道徳)	団体	只見町立只見小学校	(代表) 校長 関根 隆	せきね たかし	人とのかかわりの中で自己を見つめ、ともによりよく生きようとする児童の育成
教育課程	団体	只見町立朝日小学校	(代表) 校長 鈴木 正和	すずき まさかず	「只見愛」を育む教育課程の展開 ～学ぶ必然性とストーリー性をもったESDを目指して～
学習指導 (国語科)	個人	いわき市立久之浜第一小学校	教諭 矢内 丈博	やない たけひろ	伝え合う力を高める国語科の授業を目指して ～理解する力と表現する力の一体的な指導～

### 【奨励賞】

領域等	個人 団体	学校名	職名・氏名	よみがな	研究主題
学習指導 (国語科)	団体	鮫川村立青生野小学校	(代表) 校長 藤田 篤	ふじた あつし	「確かな読みの力を育てる学習指導のあり方」 ～個に応じた読みの指導～
学習指導 (理科・算数科)	団体	只見町立明和小学校	(代表) 校長 渡部 早苗	わたなべ さなえ	自ら自然にはたらきかけ、感じ、考え、実感できる理科学習の充実 ～学び合い活動を通して問題解決能力を育成する理数教育のあり方～
学習指導 (算数科)	個人	新地町立新地小学校	教諭 加藤 文彦	かとう ふみひこ	算数科の授業におけるICT機器の効果的な活用 ～タブレット端末や電子黒板、協働学習支援ツールでの自力解決、話し合い活 動の実践を通して～

## 研究主題

# 「人とかかわりながら課題を解決できる 子どもの育成」 ～『学び合い』を基盤として～第2期 第1次

伊達市立保原小学校



## I 主題設定の理由

平成23年3月11日に起きた東日本大震災により校舎が損壊し、3つの学校に分散し不自由な生活を余儀なくされた。その際に学級経営に関する様々な問題や学力低下が起こった。その反省を踏まえ、学習集団づくりと学力の向上を目指した学習方法について『学び合い』を導入した。

4年間の実践の結果、人間関係においては大変良好になっており、子どもの主体性が育ってきた。一方で、学力に関しては、右肩上がりではあるものの期待された成果は得られていないのが現状であった。

そこで今年度から第2期として、これまで培った『学び合い』の「みんなでみんなが」という考え方を基盤として、子どもの主体性・協働性をさらに伸ばし、学力のさらなる向上に向けた新たな「学び合い」を実践していこうと考えた。

新たな「学び合い」とは、「子どもにとって意味のある課題提示」「主体的・協働的な学び」「自己の学びの振り返り」を1単位時間に位置付け、確かな学力の向上を目指した授業のことである。これは、「アクティブ・ラーニング」を具現した実践であり、21世紀型学力の育成に向けて意義のあるものと考え、本主題を設定した。

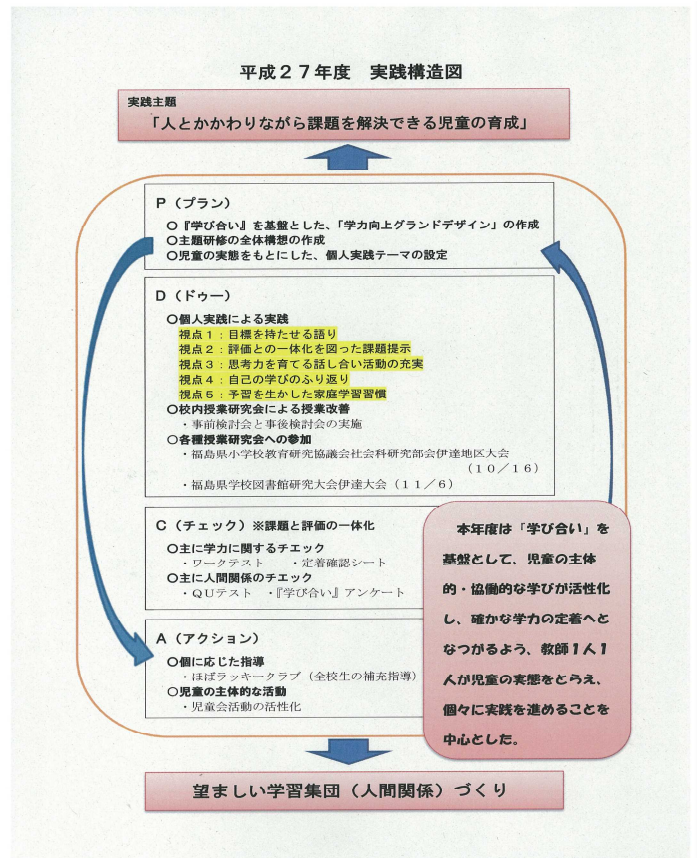
## II 研究方法・内容

『学び合い』を基盤とした主体的・協働的な学習と学校教育活動を、PDCAサイクルで実践し児童の変容等から本研究を検証していく。

特に、授業においては、子どもの実態を踏まえた教員の個人実践を中心とするため、5つの視点を設定した。また、子どもにとって意味のある課題を提示すること、主体的・協働的な学びをさせること、学びの振り返りをさせることを共通実践事項として実践を進めることとした。

さらに、2つの県研究大会を研修と検証の場と捉え積極的に取り組むことで、授業の改善に結び付けることとした。

## 1 実践構造図



## 2 5つの視点について

### 視点1：目標を持たせる語り

「語り」とは、教員が子どもの学びのよさや期待する姿について子どもに語ることであり、子どもの学びの姿を称賛して価値付け、よいモデルを示し、学び方を身に付けさせるとともに学ぶ意欲へとつなげたい。

### 視点2：評価との一体化を図った課題提示

子どもが主体的・協働的に学んでいくためには、課題設定が大切である。子どもの興味・関心を高め、子どもにとって意味のある課題や、自分は何をすべきか着地点が明確である課題を意識して提示する。

### 視点3：思考力を育てる話し合い活動の充実

授業の中で、子ども同士が課題解決に向けて学び

合うことは、思考力を育てるのに有効である。その際、ワークシートや付箋、板書等で考えを可視化することは、理解の深まりと交流につながる。そして、話し合う視点を明確にすることで、学びが活性化され、論理的思考力が育つと考える。学び合う時間を単元の中に位置付けたり、学習形態を工夫したりすること等が重要であると考えます。

#### 視点4：自己の学びの振り返り

学びを振り返ることで、自己の学びに責任を持つと同時に、次の学習への意欲にもつながる。継続して実施することで、確かな力になると考える。

#### 視点5：予習を生かした家庭学習習慣

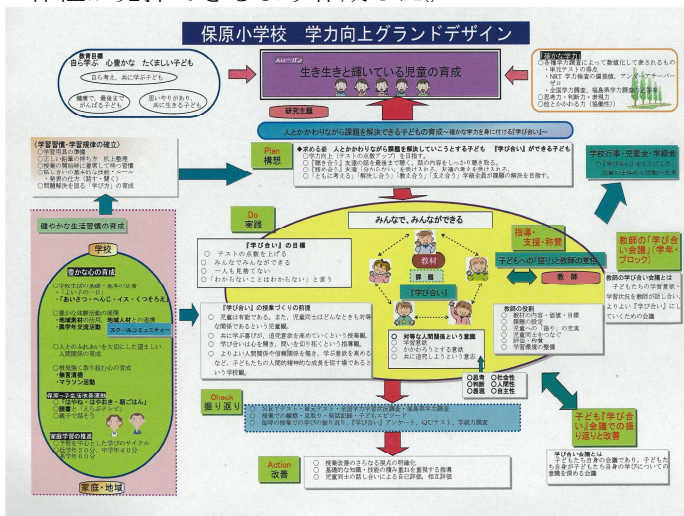
シラバスやガイダンスを通して学習の見通しを持たせることで、授業との関連を図った家庭学習の習慣化が期待できる。

### Ⅲ 実践の実際

#### 1 PLAN

##### (1) 『学び合い』を基盤とした、「学力向上グランドデザイン」の作成

『学び合い』を基盤として、学習はもちろんのこと、学校行事等の学校の教育活動全般に子どもの主体性が発揮できるよう作成した。



##### (2) 主題研修の全体構想の作成

第1期の成果を生かすことができるよう、学年の発達段階や教科の特性に応じて分類整理した。

##### (3) 子どもの実態をもとにした、個人テーマの設定

各教員が、担任する子どもの実態を把握したうえで、主体的・協働的な学びを通して確かな学力を身に付けさせるために必要なことを5つの視点に沿ってテーマを設定し、1年間実践を通して検証するようになった。

## 2 DO

### (1) 個人による実践

#### ① 視点1：目標を持たせる語り

##### 【1年算数科授業の実践】

#### 目標を持たせ、意欲を持たせる語りの工夫

導入の語りでは、はしを合わせることを意識して説明できるよう「どこをあわせるのか」、また「なぜ広くなるのか」の理由も説明できるように語りで条件について話した。

また、終末の語りでは、次のように話した。

「今日は、考えるときに自分のハンカチを使って考えたり、教えるときにハンカチを使ってわかりやすく教えたりする人がいました。それから、友達と話した後、友達のいいところをよく聞いてノートにしっかり書き足した人がいて、素晴らしかったです。」

※ 語ることにより子どもの学びの姿を称賛して価値付けることで、他の子にとってよいモデルとなり、学び方を身に付けていくことにつながった。さらに、学ぶ意欲へとつながってきている。

#### ② 視点2：評価と一体化を図った課題提示

##### 【4年国語科授業の実践】

#### 相手意識を持たせた課題の設定



本時では、「読書会を開こう」と呼びかけ、つながりのある物語を紹介する活動を行った。課題を「相手を読みたくくなるような『つながりのある物語紹介カード』を書こう。」と提示した。

相手を意識することで、文末に気をつけたり、本当に相手を読みたくなるかどうかを考えたりしながら書くことができた。

##### 【6年道徳の時間の実践】

#### 自分事として考えられる課題を設定

子どもたちが自分事として考えられる課題を設定し、友達と自分の考えを対話する時間を十分に取ることで、最終的に何が大切か振り返り、自分自身を磨き育てる場とした。

課題：もし、あなたが同じガード下にいたならば何ができるとおもいますか。

※ 「子どもにとって意味のある課題」、「自分は何をすべきか着地点が明確である課題」、「子どもにとって取り組みやすく、面白い課題」、「自分の生活と関連づけて考えられる課題」を工夫することで、子どもの主体性は高まっている。

③ 視点3：思考力を育てる話し合い活動の充実  
【6年理科授業の実践】

結果が分からない友達に説明することで  
自己の学習に責任を持つ  
～ジグソー法の活用～



水溶液がリトマス紙の色をどのように変化させたかを、ジグソーグループで伝え合った後、構成メンバーの異なるパズルグループ

に移行して再度伝え合うことで、どの水溶液がどのリトマス紙をどのように変化させるかの理解をより確実にすることができた。

【2年音楽科授業の実践】

一人一人の思いを思いっきり共感・共有する  
児童同士の学び合い



友達が何を書いたらよいか悩んでいると、「手の動きでもいいんだよ。例えばきらきらを選んだら、工夫の仕方は星が輝いているように手を動かさずって書

けばいいんじゃない。」とアドバイスする。

「うれしくてだったら、跳びはねる感じかなあ。ほしかったものをもらって嬉しいように歌うんじゃない。」と工夫の仕方を一緒に考える。友達もB児からの助言を聞きながらワークシートを書き進める。

※ 1 単位時間の授業

の中に、子ども同士が課題解決に向けて学び合う場を十分に設定することで、自分と友達の考えを比較検討しながら再考し、高め・広げることにつながった。



④ 視点4：自己の振り返り  
【5年国語科授業の実践】

書いて振り返る  
～国語日記を活用して～

授業の最後に国語日記を書いて、学習を振り返る時間を設けた。日記を書くことは、他教科でも取り組ん

でいたため、その内容の質が向上したり文章量が増えたりするといった成果がみられた。国語日記を書くことで、子どもたち自身が、自分の学びをふり返ったり、教員が子どもの学びの様子を把握したりすることができる。また、国語日記の中には、学習を通して分かったことや気付いたこと、友だちのよさなどを書いている。授業の中で触れられなかった自分の気付きやさらなる疑問、思いなども書けるようにし、子どもと教員のコミュニケーションの1つとしても考えている。

〈A児の国語日記より〉

友だちの意見を聞いて、「現在のよう」にか「愛されてきた」と書いてあるものは、歴史や支える人の観点に分けられるということが分かった。また、最初はその他の観点に分けられると思っても、話していくと違う観点に分けられることもあって、どっちに入れるか悩んだ。



友達と交流する  
中で、違いに  
気づいている。

※ 1 単位時間の終末に自己の学びをふり返ることは、学習内容の理解を確実にするために大切なことである。ふり返らせる視点として、学習内容の理解、学習への関心・意欲、友達とのかかわりがある。視点を明確にしてふり返りをさせると、焦点化したふり返りを行うことができる。

(2) 学年による実践

3学年の取り組み	
月	学年の取り組み
4月	3学年児童の実態と課題について話し、今年度の学年の方向性について話し合う。 ① 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。 ② 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。 ③ 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。
5月	① 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。 ② 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。 ③ 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。
6月	① 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。 ② 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。 ③ 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。
7月	① 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。 ② 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。 ③ 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。
9月	① 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。 ② 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。 ③ 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。
10月	① 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。 ② 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。 ③ 児童生活の振り返りや学習の振り返りを行い、学び合いを行うこととした。課題は、思考力を育てる目的の学習を学習することとした。

各学年において、子どもの実態から目指す子どもの姿（目標）、具体的実践事項を設定し、成果と課題を明らかにして、次のステップへとつなげてきた。この取組を現職教育部会で確認しているため、全学年で共有でき、改善にも役立っている。



(3) 全校『学び合い』

今年度も毎週水曜日の2校時目に全校『学び合い』を位置付けて実施してきた。今年度は、初めと終わりの「語り」を研修主任が行うようにした。これは



『学び合い』の考え方や目指す姿などを語ることで、他の教員も子どもも共通した考えで学びに取り組むことができるようにしたかったからである。「自分にもよくて友達にもよい学びとは何か」を子どもに語りかけながら、主体的・協働的な学びを促すようにしてきた。

#### (4) 校内授業研究会による授業改善

主題研修における授業研究会を5回、図書館教育プロジェクトチームによる授業研究会を4回実施した。



また、福島県小学校教育研究協議会社会科研究部会伊達地区大会が本校会場で開かれた際には、全職員で授業参観し、その後本校独自で事後検討会を実施し、本校の実践に取り

入れられることはないか話し合った。子どもの主体性・協働性を促す課題や学習形態の工夫は、大変参考になった。10月に行われた、福島県学校図書館研究大会伊達大会でも、授業提供を行った。本大会に向けて、6名でプロジェクトチームを組み、学校司書とのかかわりをテーマに、それぞれが授業を行った。全職員が自由に参観できる



ようにして、成果を共有できるようにした。学校司書などの人的環境、図書などの物的環境の整備が、学びの可能性を広げることが成果として得られた。

### 3 CHECK

#### (1) 主に学力に関するチェック

##### ○ 定着確認シート

4年生以上、年間指導計画に位置づけて実施している。正答率が低かった問題については再度行うなど、学年でフォローアップを図ってきたことで、確実な定着につながった。

#### (2) 主に人間関係に関するチェック

##### ○ Q-Uテスト、『学び合い』アンケート

1年に2回(1年生は1回)『学び合い』アンケートを実施し、子どもの意識や学級集団の状態を調査した。Q-Uテストの結果と合わせて、日々の実践に生かしてきた。今年度は、教員にもアンケートを取り、研究の推進に役立てた。

## 4 ACTION

### (1) 主体的な学びの場

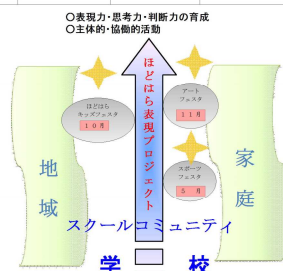
補充指導に加え、福島県算数ジュニアオリンピックの問題や子どもの興味を引く問題を掲示し、誰でも取り組むことができるようにした。問題を休み時間にも解いたり家庭でも解いてきたりと、意欲的に学ぶ姿が見られた。

### (2) 児童会活動の活性化

今年度は、『学び合い』の考え方を児童会活動にも広げた。子どもの主体性や協働性を引き出していくことを目標に、「子どもに自主的に計画・実践できる場の設定と指導」を努力事項に掲げ、「ほどはら表現プロジェクト」として児童会担当教員を中心に取り組んだ。その結果、子どもの主体的な取り組みは広がりを増し、学校行事や委員会活動にも工夫が見られ、一段と活性化してきた。中でも、子どもの思いが教員やスクールコミュニティを通して地域の人々の心を動かし、どんどん実現していった。これは子どもにとっても、大きな自信となり、着実に下級生に引き継がれている。

ほどはらキッズ表現プロジェクト基本構想  
○目指す子ども像・教師のかかわり

タイプ	タイプA	タイプB	タイプC
目指す子ども像	主体的に学ぶ意欲がある子ども	自分の役割や責任を自覚し、主体的にかかわる子ども	協働的に学ぶ意欲がある子ども
教師のかかわり	主体的にかかわる子どもを促す	協働的に学ぶ意欲がある子どもを促す	協働的に学ぶ意欲がある子どもを促す



## Ⅶ 成果と課題

### 1 成果

- 本年度は、各教員が子どもの実態を見極め、課題をとらえて実践にあたってきた。そのため、様々な実態に応じた改善のアプローチを探ることができた。
- それぞれの実践を、5つの視点で整理することにより、その成果を今後のさらなる実践の積み重ねに役立てることができた。
- 「子どもにとって意味のある課題」「主体的・協働的な学び」「自己の学びの振り返り」の3点について、共通実践としたことで、1単位時間をベースに確かな学力を身に付けるための「学び合い」の在り方を探ることができた。
- 子どもは、授業、学年の活動、学校全体の活動における様々なかかわりを通して、主体的に取り組むことができるようになった。

### 2 課題

- 「学び合い」の概念を明らかにし、全職員で共通理解を深め、保原小学校の学びを構築していく。
- 目指す子どもの姿や数値目標を、教員と子どもが共有し、その達成に向けての方策を共に考え、実行していく。

## 研究主題

# 共に関わり合い、自らを高める子どもの育成 ～言葉でつながり合う学びを通して～

郡山市立芳賀小学校



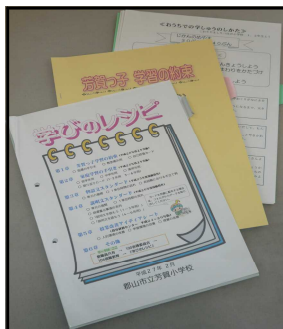
### I 研究主題設定の理由

#### 1 “活用元年”として（研究の経過から）

本校では、「伝え合い、認め合い、高め合う子どもの育成」のテーマの基、4年間、国語科の研究に取り組んだ。基本的な単元・授業の展開のあり方や重点指導事項等を明らかにするとともに、学習訓練や家庭学習の進め方等を再構築し、

《学びのレシピ》としてまとめたことで、本校の学習指導における基本軸と基盤づくりができたと考える。

そこで、今年度をこれまで培った成果の“活用元年”と捉え、新たなテーマの基、研究を進めることにした。



#### 2 今日の課題から

価値観の多様化、情報化、国際化、少子高齢化など、社会の変化が急速に進む中、これからの社会を生きる子どもたちには、他者とのコミュニケーションを図りながら人間関係を築いたり、情報を的確に活用したりするための基盤となる国語力が求められている。学習指導要領では知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育むことを目指し、言語活動を充実させることにより、児童の思考力・判断力・表現力等を高めようとしている。

未来を担っていく本校の子どもたちに、豊かな言語活動を通して基礎的な知識・技能を習得させ、思考力・判断力・表現力等を育成することや、他者と関わり合うことで学び続けようとする主体的な態度を育成することが重要であると考え、本主題を設定した。

#### 3 児童の実態から

自分の考えを分かりやすく表現する力、家庭学習の取り組み方などについては個人差が大きく、意識の向上、言語環境の充実、活動・経験の積み重ねなどが課題として挙げられ、特に、授業においては、考えることと表現することを関連させた指導の必要性を感じる。

説明的文章の学習を通し、言葉の意味を正しく理解し、論理的に考え、自分の考えを的確に表現できる子どもを育てていきたい。

### II 研究の仮説及び考え方

国語科「読むこと（説明文教材）」の指導において、児童に付けたい力を明確にした単元構想を組み立て、以下の視点に基づいた手立てを講じれば、児童が目的意識をもって学習に取り組み、交流のよさを感じながら、思考力・判断力・表現力を高めることができるであろう。

【視点1】児童に付けたい力を明確にした単元構想づくり

【視点2】確かな学力を育成する工夫

【視点3】言葉で考えをつなげる工夫

#### 《仮説に関わる用語の捉え》

- 児童に付けたい力を明確にした単元構想とは  
学習指導要領を踏まえた上で、児童の実態を適切に把握し、それに合った単元構想を組むために、学習指導要領の国語科の目標・内容から整理した《指導重点事項の系列》《目標系列と重点的に押さえない事項》を活用し、系統的に各学年で確実に指導していく。
- 目的意識をもって学習に取り組みとは  
国語科の当該単元における学ぶ目的とは、言い換えれば「単元で付けたい力」を身に付けることであり、児童にとっては、単元を通し葛藤の状況が含まれていることが重要である。そのため、教師は、どのタイミングで、誰と（何と）、何を、どのように関わらせるかを工夫していく必要があると言える。
- 交流のよさとは  
本校では、交流の意義を、児童の思考が「広がる」「深まる」「高まる」の3つと捉えている。思考が豊かに展開する経験を多く積み重ねていくことによって、知識・技能を生かして活用する力を着実に育んでいきたい。「交流」については、学習指導要領の「読むこと」・「書くこと」領域の指導事項として明記されており、発達段階に合った目標を定め、学校全体で育てていく必要があると考える。

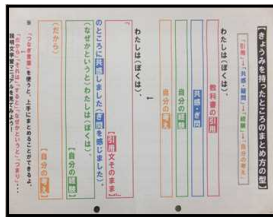
### III 研究の内容

#### 1 主題に迫る授業の改善の視点と手立て

【視点1】児童に付けたい力を明確にした単元構想づくり



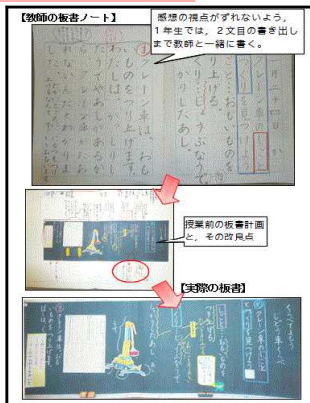
「話の基本型」の活用により児童は「引用」と自分の「経験」や「考え」を結び付けた話し方を身に付け、さらに、筆者の考えに着目して読むと感じ方に違いが出ることを知ることができた。



### (3) 手立てウ：思考の跡を残すノートづくり

#### ◎ ノート指導は「板書ノート」から

何を、何のために、どれだけの量で、どんなふうにか、その意図を教師が明確に持ち、実践を積み重ねることで、児童に育まれる思考力が格段に豊かになり、それを自分の言葉で表現できるようになる。



事前に教師が作る「板書ノート」により、発問・指示事項が精選され、本時の授業構想が明確になるとともに、児童の充実したノートづくり、思考力・表現力の育成につながった。

### (4) 手立てエ：学びを生かす（活用する）場の設定

#### ◎ 「サンドイッチ方式」で活用へ

第1学年「じどう車くらべ」では、言語活動を「世界に一つだけの自動車図鑑作り」とし、教材文を「読む」と「読む」の間に「書く」時間をサンドイッチ式に挟んで設定した。その経験を生かし、自分の選んだ自動車について調べ、図鑑にまとめるという学習に取り組んだ。説明文を「読む」「書く」という経験を重ねていったことにより、二段落構成を理解し、事柄の順序に沿って簡単な文章を書くことができた。

### 【視点3】言葉で考えをつなげる工夫の実践

#### (1) 手立てア：他者につながる場の設定

#### ◎ 「聞く」から「聴く」「訊く」へ

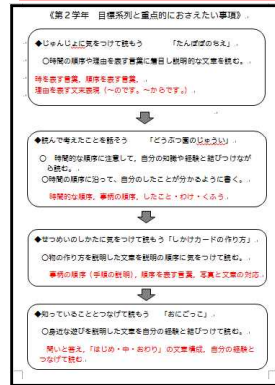
第6学年「この絵、私はこう見る」の実践では、ルソーの絵から読み取ったことや感じたことを友達に伝える場面に、ビブリオバトルを参考にした話し合い方式を取り入れた。原稿を読んだり、制限時間途中で話すことをやめたりしてはいけないルールとし、話し手は、何とか自分で言葉を探しつなぎ、思いを伝えようとする。聞き手も「訊く」ことを考えながら、精一杯「聴く」。言葉で他者につながるよさを感じた経験は、その後、生活全般における児



童同士の交流をより活発にしていた。

### (2) 手立てイ：教材とつながる場の設定

#### ◎ 指導事項の焦点化

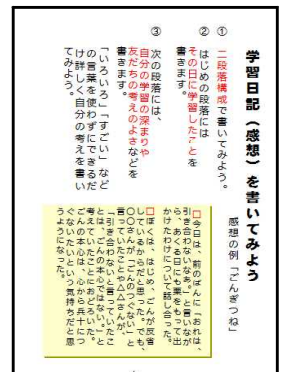


第2学年「どうぶつ園のじゅうい」では、本単元の重点的に押さえない指導事項を、「時間的な順序」「事柄の順序」等と捉えて指導に当たった。本時では、読み深めのためのキーワード「やっ」との意味を理解させるために、身近な経験と結び付けながら、順序に気をつけて獣医の工夫を読み取っていった。その際、「なぜ、気付かれたんだろう？」「そんなに嫌がっているなら、飲ませなくてもいいんじゃないの？」といった、教師の問い返しや揺さぶりが、児童の想像力と思考力を刺激し、交流を通して、深い読みにつながった。

### (3) 手立てウ：自分とつながる場の設定

#### ◎ 2段落構成の学習感想でメタ認知を

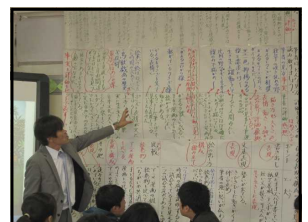
友達との意見交流を通して、自分の学びを客観的に振り返ることで、自分の成長をメタ認知することが可能となる。本校では、毎時のまとめを「学習感想」として、①本時の学習内容、②分かったこと、の二段落構成で書くことを基本型に継続実践してきた。



【感想の型（5年例）】

#### ◎ 思考と表現の関連指導

第6学年「この絵、私はこう見る」の実践で大切にすべきことは、「絵をどう読むか」よりも、絵を読み取った「感想をどう表現するか」である。そして、表現を豊かにするための良いモデルが、教材文「『鳥獣戯画』を読む」である。豊かな表現力を付けるためには、「読む視点＝書く視点」で読み取り、考える学習を大切にしなければならない。教材文全文をコピーした掲示物には、表現の工夫を読み取った学習の跡が残されており、本時の中でも表現の工夫を振り返る場面があった。思考と表現の関連指導や、継続指導の大切さを改めて実感することができた。



## 2 全校的・継続的実践事項から

### (1) 「読書活動との関連」の実践より

◇ 自分たちで図書コーナーをつくろう（3年「ありの行列」での実践）



〔学校司書のアドバイスを受け、生き生きと活動する児童〕

〔地域の図書ボランティアによる「お話し会」〕



### (2) 「言語環境の充実」の実践より

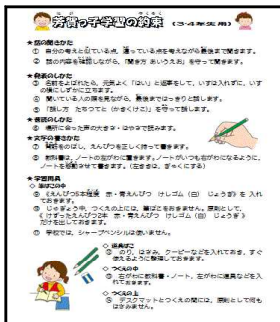
〔ことばの森（全校）〕

〔ことばの広場（各学年）〕

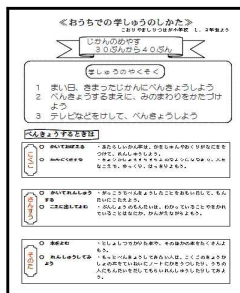


### (3) 「学習の基盤作り」の実践より

〔芳賀っ子学習の約束〕



〔家庭学習の手引き〕



ホワイトボード活用による、**解決方法や学習内容の可視化**は、児童の主体的な学びを実現し、内容の理解を深めるのに大変役立った。そうした主体的な学びで得た知識・技能は、確かな学力として長く定着していくものと期待される。全校共通の資料〈説明文スタンダード〉の改良に加え、可視化のための〈用語カード〉の整備、学習感想の書かせ方の工夫ができた意義は大きい。今後、さらに系統性を見通し、全校的な取り組みに有効活用していきたい。

○ 教師が児童用のノートに板書通りに書く「**板書ノート**」に取り組んで2年目。教師が、昨年度よりも教材研究時にノートづくりを工夫し授業実践に活用している。児童の思考の流れに沿った板書事項を組み立てることができると同時に、必要な発問・指示を明確にし、児童のノートの充実につながっていく極めて有効な方法である事が実践を通して明らかになった。

● 説明的文章の学習で培われた、根拠を明確にした考えを交流し合って学びを深めていく力は、どの学習においても基盤となるものである。今後は、国語科の他領域や、他教科の学習へと活用していくことが大切だと考える。指導事項を焦点化する中で、思考と表現の関連を図り確かな学力を身に付けさせていきたい。

### 【視点3】言葉で考えをつなげる工夫

○ 意見の交流活動において、「読む視点＝話す・書く視点」あるいは、「話す視点＝聞く視点」と意識付けしたことにより、思考と表現の関連が図られた。児童へのアンケートでも、「考えが伝わるように工夫している」「自分の考えを持って聞いている」に対し、「よくあてはまる」「あてはまる」と回答している児童が増えた。**思考と表現の関連指導を継続**して、今後の交流活動の場面に生かしていきたい。

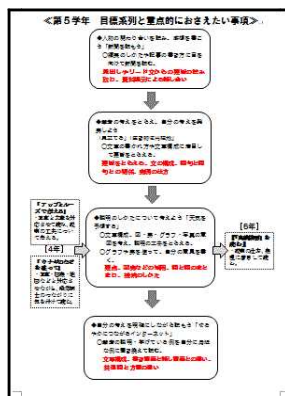
○ 児童にとっての学びの葛藤が思考を深め、それが解消されることでより深い理解に至ることを実感する。その葛藤を仕組むのが教師の役目であり、解消のために、**ねらいを焦点化した発問**や、児童の発言、つぶやき等を的確に「**つなぐ**」問い返し・切り返しが重要になる。各学年の授業において、そうした教師の発問が多く見られた。それは、授業構想に対する探究心の表れであり、普段からの実践によって培われている力量とも言えよう。今後も、学習指導法のみならず児童の姿を通して教師の役目を吟味していくような研究を続け、教師同士、切磋琢磨していきたい。

● 「他者」との交流では、さらに、聞く力を伸ばしていきたい。「聴く（＝意識を向けて詳しく聴こうとする姿勢）」や、「訊く（＝相手の考えを受けて質問する姿勢）」にまで伸ばしていきたい。相手を尊重し、意識を向けて「**能動的に聞く**」ことができる児童を育てていきたい。

## V 研究の成果(○)と課題(●)

### 【視点1】児童に付けたい力を明確にした単元構想づくり

○ 当該単元で身に付けたい力を〈目標系列と重点的に押さえない事項〉で明らかにし、〈自作の事前テスト〉や意識調査で児童の実態を把握した上で、育てたい力に合った言語活動を設定してきた。また、毎時、単元の目標を意識して指導に当たることを全指導者で確認している。**単元構想づくりを核とした全校的・継続的な取り組み**が、思考力や判断力、表現力を育み、学びを高める上で大変有効であったと実感している。



### 【視点2】確かな学力を育成する工夫

○ 毎時の学習の流れの明示や、解決方法の明確化により、児童は課題解決に向け主体的に取り組んだ。ホ

## 研究主題

### 英語に対する興味・関心を持ち 積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成 ～ Information Gap を取り入れた活動を通して～

白河市立小野田小学校 教諭 荒井 智



#### 1 研究テーマ設定の理由

##### (1) 小学校外国語活動のねらいについて

平成23年度より小学校5・6年生で外国語活動が完全実施されるようになった。小学校学習指導要領では、「外国語活動」の目標を次のように示している。

「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」

この目標には、重要な3つのポイントがある。

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③ 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

これらのことを体験的に、「コミュニケーション能力の素地を養う」ことを最終的な目標としている。

つまり中学校英語のようにスキルを向上させることをねらいとするのではなく、コミュニケーション活動などの「体験」を重視し、中学校・高等学校での言語形式を学ぶ基礎を培っていくことがねらいとなっている。

##### (2) これまでの実践から

今までの実践において、「子どもたちが英語に慣れ親しむ」「中学校に向けて英語嫌いをつくらない」ことを大切に、まずは「音声」を中心とした「子どもたちが楽しめる活動」を重視してきたが、実践を進めるにつれて、反省点が浮かび上がってきた。それは、「コミュニケーションの必要感」である。単語やセンテンスの練習の際、教師の言うことをそのまま口真似で繰り返すといった *pattern practice* や、「What's your name?」「My name is ○○。」など、あらかじめ質問内容や答えが分かりきっている活動（エクササイズ活動）で、果たして本当のコミュニケーションと言えるのだろうかということである。子ども同士英語で会話をしているのに、英語を通してコミュニケーションをしているように見えるが、子どもたちの口から出てくる英語は、実は子どもたちが本当に言いたいことではなく、教師から与えられたものになっている。つまり

目的意識や必要感を持って友達と話ができていないのではないかと感じるようになった。

##### (3) 先行研究から

これまでの自分自身の実践を振り返ってみると、最初から子どもたちに *output* させる指導が多く、*input* から *output* へどのようにつなげていけばよいか意識していなかった。そこで、第二言語習得論の *input* から *output* へのプロセスについての先行研究を概観していきたい。

佐久間(2016)は、記憶には、外界からの情報を取り入れる段階「符号化」、それをある期間頭の中にとどめておく段階「貯蔵」、そしてそのことを思い出し反応するまでの段階「検索」という3段階のプロセスがあると述べている。符号化の段階で、どのように情報処理が行われているかということ、五感を通して入ってくる様々な情報はすぐに意識から無くなってしまいが、注意を向けた情報のみに対しては「符号化」という操作が働き、記憶がスタートする。つまり、英語においても、やみくもに様々な単語やセンテンスなどを *input* させるのは意味がなく、児童にとって実際に意味や必要感があり、注意や気づきが起こるような場の設定が必要であると解釈できる。

また、村野井(2006)、和泉(2009)も英語を使えるようになっていくためには、表現が使われる実際の *context* (状況、場面) に遭遇させる必要があり、いかに生きた言葉としてその使い方を学ばせていけるかが重要課題であると述べている。その言葉を使う必要感があり、意味のある言語使用の中で起こる学習者の「気づき」が重要であるとも述べている。

教師が子どもたちに、*target sentence* をひたすら練習させて「さあ、この文の言い方が分かりましたね。実際にこの文を使って5人の友達に話してみましよう。」という学習では子どもたちの記憶にも残らない。実際の使用状況を作り「そうか、こういうときにはこんな言い方をするんだな。」と子どもたちに感じさせ、単なる言語形式ではなく、それが何を意味して、どういう場面で使われているかということを理解させる必要があるということなのである。

以上のような自分自身の反省、並びに文献研究から、学習者がコミュニケーションの必要性を感じ、自分の中で整理した語彙や表現などを実際に話していくよう

な「必然性のあるコミュニケーションの場面」を設定することが大切だと考え、研究テーマを設定した。

## 2 研究仮説

研究テーマに迫るため、以下の研究仮説で、研究を進めていくことにした。

「帯学習」と「メインアクティビティ」による授業構成を充実させ、情報交換の必要性のある「Information Gap」を取り入れた活動をすれば、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童を育てることができるであろう。

### (1) 「帯学習」と「メインアクティビティ」について

「帯学習」とは毎時間の授業の中で継続して行う学習のことである。導入で英語の歌を歌うとか、終末でアルファベットの練習をするといった活動を各時間に行うものである。これらは、基本的には、主教材と関係なく行い、外国語活動上のトレーニング的役割を果たすものである。日課表上のモジュール学習のことを意味するものではない。「メインアクティビティ」とは、主教材を扱う学習のことである。どの単元でも第1時ではinput重視の活動、そして単元の最後にはoutput重視の活動を行う。

### (2) 「Information Gap」とは

Information Gapとは、話し手と聞き手の間に情報の差があることを指す。この差を埋めるため、必然的に情報交換が行われ、コミュニケーションを成立させることができるのである。

まず、活動の中で一方が知っている情報を、もう一方が知らないという状況を作る。そして自分が知らない情報を集めないで解決できない課題を与える。こうすることで、相手はどんな情報を持っているのだろうという興味関心を高めることができる。また、持っている情報にギャップがあることで、与えられた課題を解決するために何度も聞き合う必要性がでてくるので、自ら進んでたくさんの友達と会話をすることができる。「言語は言語を使う必要があって使うもの」という考えのもと、コミュニケーションが必要な場面を教師が意図的に作ることで、子どもたちが言語を意欲的に使うことにつながると考えられる。

## 3 研究計画

### (1) 研究内容

- ① 「帯学習」と「メインアクティビティ」を用いた授業構成の工夫
- ② 「Information Gap」を取り入れた教材開発
- ③ 個に応じた効果的な評価

### (2) 研究方法

- ① 研究の対象 本学級6年生29名
- ② 事前調査 事前アンケートの実施(H27年4月)

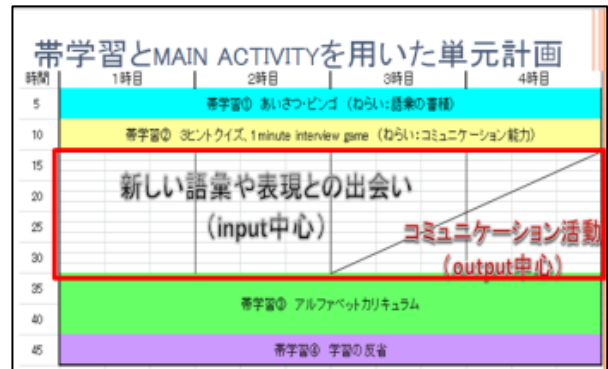
③ 授業実施 H27年度

④ 検証のための資料 事前・事後アンケート(12月)、授業観察、振り返りカード(自己評価カード)、授業者の感想など

## 4 研究の実際

### (1) 「帯学習」と「メインアクティビティ」を用いた授業構成を工夫する。

毎時間の構成を①帯学習1(5分)②帯学習2(5分)③メインアクティビティ(主教材)(20分)④帯学習3(10分)⑤帯学習4(5分)とした。



帯学習1のねらいは語彙の蓄積であり、活動としてはquick input, chants, BINGO, 3 hint Quizなどである。

帯学習2のねらいはコミュニケーション能力の向上であり、活動としてはすらすら英会話, 1 minute free talking, 1 minute interview gameなどである。

帯学習3のねらいはアルファベットの理解であり、活動はアルファベットワークシートなどを行った。

帯学習4のねらいは学習の反省であり、振り返りカードを記入させた。

これらの「帯学習」は、単元や1時間の主教材とは独立して、毎回の授業で継続的に行った。また、帯学習の内容としては、アルファベット練習や会話練習などドリル的な学習を多くした。

メインの活動は、単元の導入では、role playing, teacher talkなどのinputを重視した活動を、単元の中盤では、missing game, pointing game, keyword game等の活動で語彙に慣れ親しみ、単元の終末ではコミュニケーション活動、タスク活動などoutputを重視した活動を設定した。

### (2) 「Information Gap」を取り入れた教材を開発する。

#### ① 2人之间にあるInformation Gap (ペア活動)

##### 【実践例① 迷路ゲーム】

2人組になり、一方(A)が迷路を作成し、もう一方(B)がAの作った迷路を予想し、ゴールまで進む。

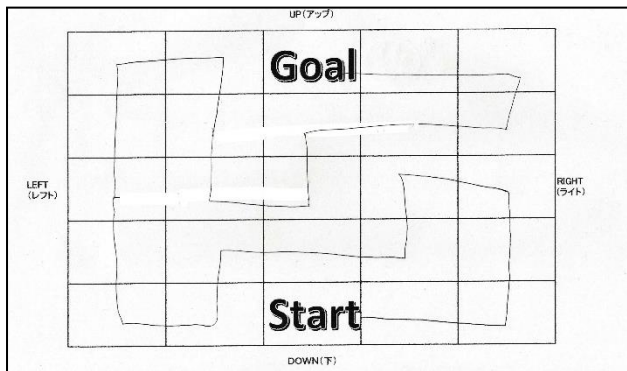
(A: 迷路作成者 B: 解答者)

B: Right? A: (自分のルートと合っていれば) Yes.

B : Up?

A : (自分のルートと合っていないければ) No.

B : Right? A : Yes. B : Up. . . . .

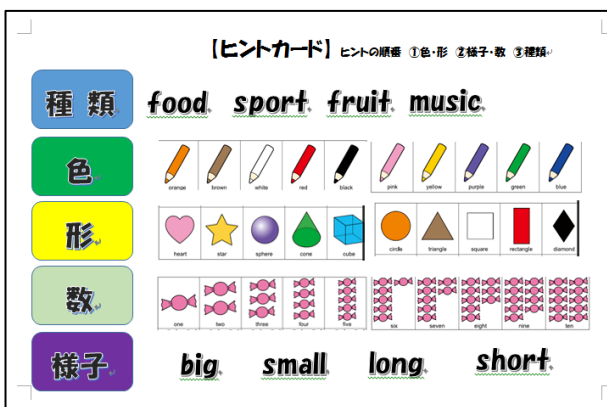


というように、解答者は「Up. Down. Left. Right」の言葉を使い、相手の作った迷路をゴールまで予想していく活動を行った。

② ペアと個人の間にある Information Gap (グループ活動)

【実践例② 宝物クイズ】

3人組で、出題者をペア(2名)、解答者を個人(1名)に分ける。解答者が絵カードを1枚引く。この時絵カードが何かを見ないようにし、出題者のペアのみ絵カードを確認する。その後、出題者のペアが解答者に発信する形で、スリーヒントクイズを通して、ヒント作りを体験させた。



まず、ヒントとなる語彙のリストを子どもたちに配付し、既習の①色②形③様子④数⑤種類の5つのカテゴリーに限定し、クイズ作りを行わせた。

活動を進めるにつれて、出題者はヒントの出し方を難しいものから易しいものにするなど、答えがすぐに分からないようにすることで、クイズが面白くなるようにすることができた。

出題者 : Hint 1. Red. 解答者 : Hint, please.

出題者 : Hint 2. Circle. 解答者 : Hint, please.

出題者 : Hint 3. Food. 解答者 : It's a tomato.

出題者 : That's right.

※違う場合には No, 惜しい場合には、Close といってクイズを続ける。

③ 一人と他全員の間にある Information Gap (クイズ活動)

【実践例③ 3ヒントクイズ】

スリーヒントクイズは、あるものについての3つのヒントを聞いて、それが何(誰)であるかを当てる活動である。

ヒントとして3つの単語を与える。

教師 : Hint 1: gray

児童 : 灰色というヒントをだけを聞いて、答えを予想し、解答用紙に書く。

教師 : Hint 2: big.

児童 : ヒント1の灰色に加えて、ヒント2の大きいを加味し、答えを予想し、解答用紙に書く。

教師 : Hint 3: Africa

児童 : ヒント1、ヒント2、ヒント3の情報を合わせて、答えを予想し、解答用紙に書かせる。

教師 : The answer is an elephant.

	クイズ1	クイズ2	クイズ3	クイズ4	クイズ5	クイズ6
ヒント1 5点	木	ソウ	月	いご	おし	ホテル
ヒント2 3点	うま	ソウ	星	いご	おし	病院
ヒント3 1点	さる	ソウ	花火	いご	さくら	病院
合計点数	1点	9点	1点	9点	1点	4点

「聞く活動」として非常に有効な活動であった。児童が楽しんで聞く活動に取り組むことができるだけでなく、「ヒントを聞く」と聞く目的が明確なため、児童は集中して英語を聞こうとしていた。

④ すべての人の間にある Information Gap (インタビュー活動)

【実践例④ 好きな国はどこかな】

下のようなカードを1人1枚ずつ配る。

	America	Australia	Brazil	China	Japan	France
Tom トム	○	×	×	○	×	×
Nancy ナンシー	×	○	×	○	○	×
Ken ケン	○	×	○	×	×	○
Ami アミ	×	○	×	×	○	○
Mike マイク	○	×	○	○	○	×

カードの見方を教える。

「トムのところを見てください。アメリカと中国のところは○になっています。これは、Tom likes America and China. つまり、トムはアメリカと中国が好きという意味です。」

同様に、Nancy, Ken, Ami, Mike の好きな国を一通り、丁寧に説明する。

その後、Tom のところを繰り返し練習させる。



教師: Tom likes America.  
 児童: Tom likes America.  
 教師: Tom likes China.  
 児童: Tom likes China.



その後、Nancy, Ken, Ami, Mike のうち、1 人を○で囲ませる。

次にゲームのルールを説明する。

「○をしたのがあなただとします。今から友達とジャンケンをします。負けた人は、I like China. などとヒントを言います。ジャンケンに勝った人は相手が誰だか当てればいいのです。当たった人は、そのカードがもらえます。カードが取られて1枚もなくなったら、先生のところに取りに来てください。それではゲームを始めます。Let's start.」

ゲームの時間は5分間とした。

児童 A & B: ジャンケンをする。

児童 A: I like Brazil and America.

児童 B: Ken ?

児童 A: Yes. 児童 B にカードを渡す。

児童 A & B: Bye. 新たなペアを探す。

児童 C & D: ジャンケンをする。

児童 C: I like China and Japan.

児童 D: Nancy ?

児童 C: No. I am Mike.

児童 C & D: Bye. 新たなペアを探す。

(参: 瀧沢 1993)

### (3) 個に応じた効果的な評価の工夫 (参: 菅 2012)

#### ① 毎時間の評価規準と評価方法の設定

毎時間、3つの観点(コミュニケーションへの関心・意欲・態度、外国語への慣れ親しみ、言語や文化への気付き)で評価規準(文部科学省 HP より)を設定した。しかし、すべての児童を全ての観点で評価することは難しいので、単元の1時間目は主に「言語や文化への気付き」について、2・3時間目は「外国語への慣れ親しみ」について、そして4時間目は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」について評価していくことにした。合わせて、評価方法についても検討した。評価方法については、①行動観察、②発表観察、③ファイルチェック、④自己評価、⑤相互評価などがあるが、それぞれの時間の活動にふさわしい方法を選択した。

#### ② 評価補助簿の作成

効率よく、正確に評価するため「評価補助簿」を作成した。積極的に活動している「◎」、これまでより意欲的に活動している「○」で記入し、マイナス評価はしないようにした。また、「はっきりと話している」「進んでペアで活動している」など特筆すべきことを記入

するようにし、最後に①行動観察、②発表観察など見取った方法を数字で書き込むようにした。また③ファイルチェック、④自己評価、⑤相互評価は、授業後にノートやワークシートで評価した。単元を通して評価したことで、適切な評価ができたものとする。

[評価方法]		①行動観察: 行	②発表観察: 発	③"Hi, friends!" : H.f.	④自己評価: 自
各時の評価規準と評価方法		第1時【主に: 言語や文化】		第2時【主に: 慣れ親しみ】	
		世界では様々な人々が様々な生活をしていることを知り、世界の国々に興味を持っている。		自分の行きたい国やその理由を知っている。	
No.	名前	評価方法<②発, ③H.f.(p.18, 19), ④自>		評価方法<①行, ②発, ③H.f.>	
1		◎ 着いた子 ◎			
2					
3					
4		◎ Hi, friends! ◎		◎ 国の名を知る ◎	
5				◎ 行きたい国を挙げる ◎	
6					
7		◎ いろいろ話すよ、知、知、知 ◎			
8					

## 5 成果と課題

### (1) 成果

事前事後アンケートを比較すると、全ての項目で良好な結果となった。特に、具体的な活動については「友達と英語を使ってやり取りする。」など他人と積極的に関わるといった項目が改善され、また、児童が感じる喜びでは「友達とお互いに何かを伝え合うことができたとき」など英語で友達に伝えることができたときのうれしさの項目などで良い評価をする子どもが増えた。これは本研究の内容が有効に働いたものとする。

### (2) 課題

- ① 担任単独の授業、担任とALTの授業等におけるさまざまな形態における活動のデモンストレーションや、授業の組み立て方の研究を進めていく。
- ② ペアやグループ等の形態を効果的に取り入れることで、さらにコミュニケーション活動を意味のあるやりとりにしていく。

### ☆ 主な参考文献・引用文献

- ・和泉伸一 (2009) 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』大修館書店
- ・菅正隆 (編著) 大牟田市立明治小学校 (著) (2012) 『外国語活動を徹底サポート! "Hi, friends!" 指導案&評価づくりパーフェクトガイド』明治図書
- ・佐久間康之・太田信夫 (2016) 『英語教育学と認知心理学のクロスポイント〜小学校から大学までの英語学習を考える』北大路書房
- ・高島秀幸 (編) (2005) 『文法別項目 英語のタスク活動とタスクー34の実践と評価』大修館書店
- ・瀧沢広人 (1993) 『英語授業改革双書4 英語授業面白ゲーム集』明治図書
- ・瀧沢広人 (2009) 『生徒にゲットさせたい“英語の学習スキル” —入門期の指導ステップ(ビギナー教師の英語授業づくり入門)』明治図書
- ・村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店

## 審査の観点及び審査総評

### 【審査の観点】

- (1) 研究の意図が明確で、主題が適切なものであるか。
- (2) 研究の対象が明確であるか。
- (3) 研究の計画及び内容が適切であるか。
- (4) 論旨が一貫しており、説得力があるか。
- (5) 必要な資料が精選され、整えられているか。
- (6) 結論の導き方は適切であるか。
- (7) 今後の実践に生かす手だてを講じているか。

### 【総 評】

本年度もたくさんの論文応募がありました。忙しい校務を抱えながら研究をまとめている先生方に心から敬意を表します。日々の授業課題や児童生徒の実態をしっかりと受け止め、なんとか授業を変えたいという願いに支えられた研究は、いずれも値打ちのある貴重なものです。それぞれの研究に共通しているのは、児童生徒の学び合いを中心にすえた実践となっており、表現や用語は違っていても、児童生徒と教材との対話、児童生徒同士の対話、児童生徒自身との対話がとても大切にされていることです。しっかりと子どもたちの話に耳を傾け静かに見守っている教師の姿も目に浮かびます。今後さらに研究をよりよいものにするために以下のことを考えていただければ幸いです。

教育研究は教師自身のためにすると言うと、「否、児童生徒のためにするものだ」と厳しいお叱りを受けるかもしれません。しかし、教育という仕事にかかわりのなかった人が教師として児童生徒の前に立つためには、それに相応しい技量や見識、哲学が必要なことはいうまでもありません。研究をするということは教師が専門家として成長していくために不可欠なものです。たとえば、研究は職人が技量を高め、道具を常にいい状態に保つことと同じことなのです。一方で研究は、技量を高めたいと考える他の教師にとっての指南の役割も担っています。論文に記載されていることを参考に自分でも試してみようという人々に対して、内容が明確でわかりやすく、ある程度の再現性も必要になってきます。このことを踏まえると、より多くの実践例と児童生徒の姿がよりはっきりと浮かび上がってくる記述が欲しいと考えます。児童生徒の見せる個々の事実を、研究主題の視点に基づいてていねいに積み上げていくことが、研究に深みと広がりをもたせるものと考えます。

## 平成28年度福島県教職員研究論文 応募状況

1 1次審査通過論文数 29 点

総論文数30点

### 2 内 訳

(1) 教育事務所別(1次審査通過論文数)

県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき	計
6	4	7	4	4	3	1	29

(2) 学校種別(1次審査通過論文数)

幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	自然の家	計
0	22	6	0	1	0	29

(3) 各教科、領域等及び教育事務所別内訳

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	自然の家	計	県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき	計
国語		3					3			2				1	3
社会		3					3	2				1			3
算数・数学		2					2		1				1		2
理科		1	1				2				1		1		2
生活・総合		1					1	1							1
音楽															
図画工作 美術															
技術・家庭															
体育															
外国語活動 英語		1	1				2		1	1					2
道徳		2					2			1		1			2
特別活動															
生徒指導															
学校保健		1					1	1							1
教育課程		1					1					1			1
特別支援		1			1		2	1		1					2
日本語指導		1					1				1				1
学習指導 一般		4	3				7	1	2	2	1	1			7
学級経営		1					1				1				1
教職員研修			1				1						1		1
合 計		22	6		1		29	6	4	7	4	4	3	1	29

## 平成28年度 福島県教職員研究論文応募者一覧

領域等	個人 団体	学校名	氏名	研究主題名
国語	団体	鮫川村立青生野小学校	藤田 篤	「確かな読みの力を育てる学習指導のあり方」 ～個に応じた読みの指導～
	団体	塙町立塙小学校	鈴木 雅人	適切に表現したり、正確に理解したりする力の育成 ～読む力を育てる言語活動の充実～
	個人	いわき市立久之浜第一小学校	矢内 文博	伝え合う力を高める国語科の授業を目指して ～理解する力と表現する力の一体的な指導～
社会	個人	伊達市立小手小学校	川村 国央	社会的事象を自分事として捉えさせ社会参画の意識を芽生えさせる 社会科学学習指導の在り方 ～PDCA学習サイクルを通して～
	個人	桑折町立醸芳小学校	板倉 正哉	社会的事象に主体的に関わろうとする児童の育成
	個人	南会津町立桧沢小学校	石川 淳	地域に対する誇りと愛情をもつ児童の育成 Vol. 2 ～社会科 第6学年 地域素材の活用を通して～
算数・ 数学	団体	郡山市立朝日が丘小学校	圓谷 円	いきいきと学び、確かな学力を身につけていく子どもの育成 ～一人一人が「わかる」「できる」「伸びる」喜びを味わえる算数科学習の工夫～
	個人	新地町立新地小学校	加藤 文彦	算数科の授業におけるICT機器の効果的な活用 ～タブレット端末や電子黒板、協働学習支援ツールでの自力解決、話し合い活動 の実践を通して～
理科	個人	会津若松市立第一中学校	齋藤 貢一	「生徒の思考力・判断力・表現力を高める学習指導」
	個人	南相馬市立原町第三小学校	今野 昌樹	習得した知識や技能を活用して問題を解決するための4つの「しかけ」から、科学 する子供を育てる理科指導
生活	個人	福島市立野田小学校	高玉 美加	思考力・表現力を育てる生活科の指導の工夫
外国語 活動・ 英語	個人	田村市船引南中学校	佐藤 仁	英語の運用能力の育成に関する指導法の研究 ～意味理解優先の指導法とPDCAサイクルによる授業の改善～
	個人	白河市立小野田小学校	荒井 智	英語に対する興味・関心を持ち 積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成 ～Information Gap を取り入れた活動を通して～
学習指導	団体	伊達市立保原小学校	佐藤 喜夫	「人とかかわりながら課題を解決できる子どもの育成」 ～『学び合い』を基盤として～ 第2期 第1次
	団体	郡山市立芳賀小学校	堀内 真人	共に関わり合い、自らを高める子どもの育成 ～言葉でつながり合う学びを通して～
	団体	郡山市立郡山第一中学校	味原 悦雄	主体的に学び、表現できる生徒の育成 ～表現力を育てる指導の工夫（3年次）～
	団体	中島村立中島中学校	後藤さとみ	確かな学力を身につけ、自己実現を図るために「協働的な学び」の充実を目指す 授業研究
	団体	矢吹町立矢吹中学校	箭内三紀夫	確かな学力の向上を目指す指導の工夫・改善 ～日々の授業の充実・改善と「つなぐ教育」の推進を基軸にした実践を通して～
	団体	喜多方市立第二小学校	神田 優子	「自ら学び、考える力を伸ばす授業の創造」 ～学ぶ喜びを味わわせる 子ども主体の学び合いを通して～
	団体	只見町立明和小学校	渡部 早苗	自ら自然にはたらきかけ、感じ、考え、実感できる理科学習の充実 ～学び合い活動を通して問題解決能力を育成する理数教育のあり方～

日本語指導	個人	会津若松市立松長小学校	那知上恵一	外国人児童が生き生きと学校生活を送るための日本語指導の実践
道徳	団体	鮫川村立鮫川小学校	芳賀なおみ	豊かなかかわりの中で、自己を見つめ、共によりよく生きようとする子どもの育成 ～道徳の時間における言語活動の充実を通して～
	団体	只見町立只見小学校	関根 隆	人のかかわりの中で自己を見つめ、ともによりよく生きようとする児童の育成
学級経営	個人	会津若松市立鶴城小学校	岩本 宏幸	「アクティブ・ラーニング」で協働的・互恵的な子供が育つ学級経営 ～「つながる」関係の基盤作りと「振り返り」の充実で汎用的能力を高める実践を通して～
特別支援教育	個人	伊達市立堰本小学校	伊藤 律子	通級指導教室における不注意優勢型 ADHDの児童の自立をめざした支援のあり方
	個人	二本松市立岳下小学校	齋藤 隆康	「思いをことばで伝える力を育む難聴児への指導のあり方に関する実践研究」 ～外部専門機関との連携を活かした難聴学級における授業実践～
	個人	福島県立西郷養護学校	佐藤 綾	自閉症のある児童が他の児童とともに学び、育ち合う授業づくり ～生活単元学習における主体的で協働的な学びを目指して～
学校保健	個人	本宮市立糠沢小学校	浦川 周子	集団における肥満解消のための食育指導と保健指導の工夫
教育課程	団体	只見町立朝日小学校	鈴木 正和	「只見愛」を育む教育課程の展開 ～学ぶ必然性とストーリー性をもったESDを目指して～
教職員研修	個人	南相馬市立原町第一中学校	長階 哲哉	初任者研修の制度としての成果と実態 ～拠点校指導教員として～

## おわりに

福島県教職員特選研究論文集は、県内の教育に携わっておられる教職員の優れた教育実践を奨励、普及するために発刊しており、今回で23回を数えます。

今年度は30点の応募をいただきました。応募論文からは、学習指導要領を視野に入れながら、各学校が抱える課題を的確に捉え、児童生徒の発達段階に応じた手立てを講じて育成したい資質・能力を育もうとする実践等、教師としての高い志を感じるとともに、教育の専門家としての力量を高めようとする真摯な姿勢が伝わってまいりました。

特に、入賞論文においては、確かな学力の育成、豊かな心の育成、コミュニケーション能力の育成、そして、震災からの復旧・復興に積極的に児童生徒を関わらせる取組など、まさに「生き抜く力」を育成するために、適切な研究手法のもとに研究を進め、よりよい成果をあげようとする実践研究が見られました。

本論文集には、応募者全員の研究主題を掲載してありますので、今後の研究や実践の参考にしていただきたいと思います。

最後に、各学校及び教職員におかれましては、東日本大震災という未曾有の災害と幾多の困難に立ち向かいながら、目の前の児童生徒へ全身全霊で関わり、未来のふくしまを創造する人材の育成に努めていることと思います。

これからも、教育のプロとしての力をさらに磨かれるようお願いするとともに、児童生徒の夢や希望の実現に向け、次年度も幅広い教科領域・校種から、積極的に御応募くださいますようお願いいたします。

---

---

平成28年度福島県教職員特選研究論文集

平成29年3月発行

編集・発行 福島県教育委員会

---

---